

2015年7月10日



《人生四季：夏》2015、火薬、カンヴァス、作家蔵

蔡國強展：帰去来

Cai Guoqiang
There and Back Again

横浜美術館では、明日7月11日（土）より、ニューヨークを拠点に活動する、現代美術界を代表するアーティストのひとり、蔡國強（ツァイ・グオチャン、1957年、中国福建省泉州市生まれ）による、個展「蔡國強展：帰去来」を開催いたします。本展は、2008年に広島市現代美術館で開催された個展「第7回ヒロシマ賞受賞記念 蔡國強展」以来、国内では7年ぶりの個展です。また首都圏の公立美術館では、1994年に世田谷美術館で開催された「混沌 蔡國強」以来、実に21年ぶりの個展となります。

陶淵明の詩「帰去来辞」から引用したタイトル「帰去来」には、1986年末に来日し、作家として自由な創作を開始した地である日本という原点に立ち返る、という蔡の精神が表れています。本展のために、横浜美術館であらたに3点の新作が制作されました。

圧倒的な美しさとともに、驚きと発見をもたらしてくれる蔡國強の世界をお楽しみください。

火薬ドローイングから火薬絵画へ

本展のために蔡は2点の火薬による大型作品を、横浜美術館グランドギャラリーにて滞在制作いたしました。

1つは、縦8×横24メートルの和紙に描かれた大作《夜桜》で、本作は蔡の手がけた過去最大サイズの火薬ドローイングとなります。

また、もう1点の火薬による平面絵画はカンヴァスを支持体にした4点組の作品《人生四季》。月岡雪鼎（つきおかせつてい）の肉筆春画に着想を得た本作において、蔡は鮮やかな色彩を加えた火薬絵画に初挑戦しました。蔡は長年研鑽を重ねてきた「火薬ドローイング」の新境地として、本作ではより絵画的表現「火薬絵画」の新境地へと踏み出しました。

蔡國強の自伝「99の物語」を含む展覧会カタログ

展覧会カタログには、展示風景、展覧会ドキュメントを掲載し、7月24日（金）に発行いたします。さらに本カタログには、蔡自身による自伝「99の物語」の日本語訳を収録し、蔡國強の生い立ちから芸術に対する思想を俯瞰します。

横浜市内の大学とのコラボレーション

本展は、蔡國強の制作スタイルである「土地の人々との対話」のもと、火薬作品の制作に携わった数十人にのぼる市民ボランティア、そして横浜に校舎を構える2つの大学との連携により、多くの人々との協働で制作されました。

本展の制作過程を追ったドキュメンタリー映像《蔡國強：帰去来》は、東京東京藝術大学大学院映像研究科 桂英史研究室 | geidaiRAM が、テラコッタによる作品《朝顔》は、横浜美術大学の学生が数百の花や葉、つぼみを手作りしました。

「アートを通じ対話し、一生に一度の物語を創る」という蔡の作品の醍醐味をご覧ください。

「アートアイランド・プロジェクト」の世界初公開

本展では、蔡が長年にわたり構想してきた教育的なオンラインゲームのプログラム「アートアイランド」を、世界で初めて公開します。オンラインゲーム上のワークショップ内で協力し、意見交換することで、東アジアの平和と相互理解を図ることを目的としたもので、ローンチとなる本展では、蔡による花火とロボットのワークショップを体験することができます。今後、東アジアの芸術家、デザイナーや建築家が招かれ、新しいワークショップを追加していく予定です。



Photo by: KAMIYAMA Yosuke

蔡國強一歸去来

逢坂恵理子（横浜美術館館長）

*カタログテキストより（書誌情報：文末参照）

蔡國強「さいこっきょう」という名前をしばしば耳にするようになったのは1988年頃であろうか。彼の作品を最初に観たのは、1990年、福岡の街中を使った「ミュージアム・シティ・天神'90」であったように思うが、その翌年、東京、四谷のP3 art and environmentで開催された個展「原初火球—Project for Projects」の展示は忘れがたい。照明を落としたギャラリーに、まるで爆発後の中心から放射されるエネルギーの拡散を暗示するかのごとく、7枚の屏風仕立ての火薬ドロ잉が、放射状に配置されている。スポットライトに照らされた火薬ドロ잉は、ギャラリーの空間に漂う気を凝縮させ、かつ弛緩させる。宇宙の始まりのビッグ・バンを意味する中国語「原初火球」が示すように、火薬の爆発痕により表現された宇宙の生成と人間生命の胎動を暗示させる作品群は圧倒的であった。

蔡の生まれ故郷、福建省の古都、泉州は、彼が小学校の頃、海峡を隔てて大陸と台湾の戦闘の前線となっていた。「私たちの町では、通学の途中や授業中でさえたびたび警報が鳴り響き、その音がすると物影に身を隠したものです。空には大陸と台湾の戦闘機が飛び交い、それに地上からの砲撃が加わって、天上では白煙の筋が何本も入り乱れていました。まもなく文化大革命が起き、私は人間と文明、人間と人間との関係において残酷な専制時代のなかで成長しました。このことは、人間から人類、美術から文明にいたる私の基本的な認識における布石になったと思います」。*1 中国四大発明の一つである火薬は、戦闘の武器や破壊に用いられてきたが、蔡は火薬の破壊力と暴力に宇宙的な視点から創造と美を加え、美術作品へと昇華させたのである。

7枚の屏風は、外星人のためのプロジェクトよりNo.6《大脚印—ビッグ・フット》、No.7《ベルリンの壁を再現する》、No.8《烽火台を再燃する》、No.9《胎動II》の4点、人類のためのプロジェクトよりNo.2《ある一つの月蝕》、No.3《月球・負ピラミッド》の2点、そして《時空模糊プロジェクト》の1点で構成されていた。宇宙では爆発によって惑星や恒星が生まれ死んでゆく。爆発は生成でもあり消滅でもある。私たちの想像をはるかに超える壮大で混沌とした大宇宙と、人間という小宇宙との関係性を、可視、不可視の視点から探るこれらの火薬ドロ잉は、展覧会のサブタイトルプロジェクトのためのプロジェクトが示しているように、各々が、蔡が今後展開しようとしているプロジェクトの構想図でもあった。「日本は“明治維新”後ずっと西洋化を追い続けてきました。彼らは西洋からどのように見られているかをとても気にしていました。私が当時日本で『外星人のためのプロジェクト』を始めた目的は、西洋、東洋にこだわるのではなく、宇宙や宇宙人の角度から人類を見たかったのです」。*2 蔡國強が紅虹(ホンホン)夫人とともに来日したのは1986年12月であった。来日後、約9年を過ごした日本での日々は、蔡にとって、異文化の中で思索し、創作の構想を検証し実現・発展させた大いなる醸成期と言っても過言ではないだろう。当然のことながらその創作へのゆるぎない意志と実行力は、アーティスト本人に帰するが、蔡の稀有な作品とその思想に刺激を受けた日本人は少なくなかった。

容易には慣れることができない異国にあって、日本語がおぼつかない初期から、蔡の人々を巻き込むコミュニケーション力と、真摯で柔軟な人柄にも魅了され、同世代を中心に多くの美術関係者や市民が、彼の滞在と創作を支援した。斬新な美術への支援が常にそうであるように、蔡の場合も公的支援よりも私的、草の根的な支援が先行した。そして、その支援の輪は、まるで導火線への着火後、瞬時に爆発する火薬のように、短期間で公立美術館での展覧会へと導いたのであった。

蔡は来日前から火薬を使用した作品を創作している。しかし、来日直後は、中国と異なり規制の厳しい日本で火薬を入手する手掛かりを見いだせず、おもちゃの花火を解体して得た少量の火薬で、制作を試みていたという。日本で火薬によるドロ잉やプロジェクトを発展させることができたのは、1987年に出会った美術評論家の故・鷹見明彦と日本の花火師の理解と協力が

大きかった。*3 その成果は、前述した P3 art and environment での個展に結実し、1993 年には芹沢高志を中心とした P3 が推進役となり、屋外での壮大な計画《外星人のためのプロジェクト No.10：万里の長城を 1 万メートル延長するプロジェクト》を中国、嘉峪関(ジアユイグアン)で実現している。*4

1994 年から 1995 年は、彼の次なる転換期と言えるだろう。資生堂ギャラリー、京都市役所、いわき市立美術館、水戸芸術館、世田谷美術館、広島市現代美術館、東京都現代美術館、ワタリウム美術館のほか国内の画廊や海外で、展覧会やプロジェクトが相次いだ。1987 年の東京での初めての個展以降、東京、いわき、取手に滞在しながら 1995 年に渡米するまで、展覧会やプロジェクトを推進する蔡のギアは加速を続け、彼は 10 年足らずで、その存在を日本の現代美術界はもとより、海外にも刻印することができたのである。

第 46 回ヴェネチア・ビエンナーレの関連企画「トランスカルチャー展」で、蔡は《マルコ・ポーロの忘れ物》を実現した。それは、多くの文物を西欧にもたらしたマルコ・ポーロが、持ち帰らなかったもの一天と人の秩序を示す東洋の宇宙観や生命観をヴェネチアに届けるというプロジェクトだった。海のシルクロードにおいて、泉州は東方の起点となる交易港として栄えた古い文化都市であり、マルコ・ポーロの『東方見聞録』にもその記述がある。*5 蔡は、泉州から海のシルクロードを辿ってヴェネチアまで、古い木製のジャンク船を航行させ漢方を運びこんだ。展覧会場では心身を浄化させる漢方薬を用いた飲料が調合され、来場者は自分の身体の状態に合った飲料を買うことができる。会場で私はこの飲料を飲みながら、マルコ・ポーロと作家自身が時空を超えて連なるプロジェクトを、驚きをもって味わったのだった。

火薬、花火、風水、漢方、陰陽、生命、宇宙、エネルギー、気、摂理、時空—蔡の作品は、中国古来の文化や思想を援用しつつ、過去—現在—未来をつなぐ壮大な構想に裏付けられ、今まで私が出会ったいかなる作品とも異なる美と強度を兼ね備えたものであった。

ニューヨークを新たな活動拠点に定めた蔡は、この美術界において自身の作品に説得力をもたらすために、作品を生み出す理念、美的造形と構想、視覚的効果、社会的要素を注意深く再考した。「アメリカでは人々は国内外の社会で起こる問題にととも関心を持っています。政府も市民もそうです。それも私に影響を与えました。宇宙と自然の問題以外に、より多く社会と人類の運命の話題に関心を持つようになりました」。*6 競争の激しいニューヨークの美術界において、西洋の文脈という大きなうねりに絡めとられることなく、絶妙な距離を保ちつつ、独創的な作品を提示し続けることは容易ではない。蔡は、西洋と東洋の対比という単純な構造を越え、融通無碍(ゆうずうむげ)ともいえる彼独自の視点を駆使して視覚的で劇的であり、多義的な社会的メッセージを含むインスタレーションへの関心を高めていった。

2008 年は蔡にとって更に大きな一歩を踏み出すビッグ・フットの年となった。大規模な回顧展「I Want to Believe」がグッゲンハイム美術館で開催され、現存作家の個展として、記録的な来場者数を誇ったのである。その後、この回顧展は北京中国美術館にも巡回した。北京オリンピックの開会式では、「大脚印」の構想を実現した蔡の花火《歴史の足跡》が打ち上げられ、全世界の約 20 億人の耳目を集めている。この《大脚印—ビッグ・フット》の構想は、1991 年、前述の P3 art and environment の個展において発表され、長い年月を経て実現した舞台が北京であったのは、極めて象徴的だ。長年にわたる蔡の活動そのものが、多様な境界を越えて往来するビッグ・フットと重なるからである。蔡は《大脚印—ビッグ・フット》について次のように述べている。「E.T. が国境を無視するように、われわれの内部に棲み、ときとしてその根源の力を現す超人類の意志も、国境線を無視する。地球上どこでも人類が共有する地平線がある。しかしこの地球の地平線を越えた向こうに、さらに人類が共同で目指すべきものがある。それは、われわれが速やかにやってきて、また帰ってゆくところ…すなわち『宇宙の地平線』である。

『帰去来兮』。*7 2013 年に開催されたオーストラリア、クイーンズランド州立美術館での個展「Falling Back to Earth」の

中国語名は「歸去來兮」である。展覧会の構想を練る現地調査でオーストラリアの自然に着目した蔡は、オアシスで水を飲む動物を配した大規模なインスタレーション《Heritage》(遺産)を制作し、動植物をめぐる環境破壊の緊急性を提示した。「アートが面白いのは、本物ではないけれども、どこかで本質の世界をみているように思えること。ですから想像力が必要です。社会問題などリアリティのあることをテーマにしても、そこからちょっと距離があるほうが、アートの生き残る余地が出てきますね」*8

1995年に日本を離れてから20年を経た今年、横浜美術館で開催される本展のタイトル「歸去來」は、中国の詩人、陶淵明*9の代表作『歸去來辞』から引用されている。官職に就いていた陶淵明が、その職を辞して故郷に帰り田園に生きる静かな決意を謳ったこの詩は、自己の信念に従い、自然の運行に身をゆだねる自由と憂愁を表しており、自らの生き方に対する矜持が示されているといえよう。

「蔡國強展：歸去來／Cai Guo-Qiang: There and Back Again」—この個展の和英タイトルは、中国の泉州から日本を経てニューヨークへ渡り、国際的な美術界で不動の地位を築いた蔡が、日本という故郷に再び還るという意味を示していると同時に、人間の自由な精神と良心への希求、そして大いなる自然との融和という本来あるべき人間の姿への原点回帰をも象徴している。かつて外星人の視点で作品を創作してきた蔡は、人類や自然、人間社会への関心を高めつつ、一方では孤独に耐えながら、自らのあるべき姿を模索し続けているようにも見える。

今回、蔡は、横浜美術館のグランドギャラリーで8日間にわたり、学生や市民とともに、火薬爆発による作品制作に取り組む。「火薬の魅力は、常にコントロールできない部分があること」と語る蔡が、かつて火薬ドローイングを発展させた日本で、改めて挑戦するのは新しい火薬絵画である。帰り、去り、そしてまたやって来る「歸去來」とは、創造の出発点であった画家としての原点を涉猟する、蔡自身のタイムトラベルでもあるのだ。

世界各地で対立や混迷を深める現代、地球に降り立った蔡が本展のために差し出すキーワードは、「しなやかさ」だ。人間、植物、動物をモチーフとした作品は、自然と人との調和や循環、輪廻、そして人間性への問いかけが表現され、私たちの想像力を刺激する、今までとは異なる蔡の世界観が示されるだろう。

*1 対談「蔡國強+P3」『原初火球』P3 art and environment、1991年(展覧会カタログ)

*2 「私は変わっていない。まだ“正しいナショナリストだ”」『ニューヨーク・タイムズ』オフィシャルサイト中国語版、2013年8月12日、李秀一訳

*3 鷹見明彦「特集1 蔡國強 龍奔る 全時空的旅程総覧」『美術手帖』1993年3月号 Vol. 51 No. 786、pp. 21-26

*4 このプロジェクトについては『蔡國強 宇宙的長城 万里の長城を1万メートル延長するプロジェクト』(ペヨトル工房、1994年)に詳しい。

*5 「172 ザイトゥン市」マルコ・ポーロ/愛宕松男訳注『東洋文庫 183 東方見聞録 2』平凡社、1971年、pp. 113-118

*6 前掲書『ニューヨーク・タイムズ』オフィシャルサイト中国語版、2013年8月12日、李秀一訳

*7 前掲書『原初火球』

*8 記念対談「アート—創造と破壊の臨界点 蔡國強×浅田彰」『第7回ヒロシマ賞受賞 蔡國強』展覧会カタログ、2008年、p. 35

*9 陶淵明(365-427)は中国、六朝時代の詩人。著作にユートピアを描いた『桃花源記』、『五柳先生伝』など

書名 : 「蔡國強展：歸去來」

発行予定日 : 2015年7月24日

出版社 : モ・クシュラ株式会社

判形 : A4変形、上製本

価格 : 2800円(税込)

内容 : 谷川俊太郎の詩、全作品図版、メイキング・ドキュメンタリー、学芸員エッセイ

(逢坂恵理子、木村絵理子、沼田英子、中村尚明 [掲載順])、蔡國強によるステートメント、
ならびに自伝「99の物語」日本語版を収録。※日英表記(「99の物語」を除く)

今回の帰還 蔡國強

*カタログテキストより（書誌情報：文末参照）

初志：「帰去来」

1995年9月に日本を離れ、アジアン・カルチュラル・カウンスル（ACC）の助成を受け、研修のためアメリカに渡った。その後、ほぼ2、3年ごとに来日しては、講演をしたり、賞をもらったり、展覧会を行ったりしていた。特に、2011年の東日本大震災以降は、毎年日本に来て、いわきの友人たちと「いわき万本桜プロジェクト」を実施し、地元の人たちと一緒にいわき回廊美術館をつくったりした。

日本との関係は途絶えなかったが、生活や芸術活動の拠点は他へ移った。二十年来、ヨーロッパやアメリカ、中国大陸、台湾で数多くの回顧展や個展、大型プロジェクトを行い、同様の活動は、南アメリカ、オーストラリア、さらにはアラブのカタールや、東ヨーロッパのウクライナにまで及び、地球をほぼ一周した。私はそろそろ、若い頃の出発点となった日本へ帰る頃だとはっきり感じるようになった。当時は生活も苦しく、作品制作の予算も少なかったが、あれこれ考えを廻らし、様々なアイデアも浮かび、気力も旺盛で、打開する力もあった。1986年の年末に日本へ来る前、すでに故郷の中国泉州において、火薬を爆発させて絵を描くことを徐々に始めてはいたが、アーティストとして美術館で正式に展示を行い、作品を通じて社会と関わった出発点は、日本だった。かつて馴染んだこの土地と文化のもとに帰り、若い頃の自分の状態や視野をもう一度思い出し、世界をとらえて表現してきた中で、無くしてしまったもの、取り戻すべきものはないのか、確認したい。

こう希望した矢先、思いがけず横浜美術館、里山現代美術館などから個展開催の招聘を次々にいただいた。日本へ戻って滞在し、その地の人々－美術館、ボランティア、メディア、友人たちと対話ができる。私はこうして日本に帰って来た！

横浜での個展は「帰去来」と名付けた。2013年にオーストラリアで行った展覧会名は「帰去来兮」で、英語のタイトルは意識して「地球への帰還（Falling Back to Earth）」だったが、今回は「行って、戻って来た（There and Back Again）」にした。始めは、この2つの展覧会名が似ているのが気になっていたが、私を支えてくれる人たちの後押しもあり、やはりこれ以上のタイトルはないと思ったのだ。「帰去来」は今回の展示のテーマでもある。一人の学徒の芸術上の帰郷でもあり、また当時の純粋な気持ちを取り戻し、原点に遡りたいという願いも込めた。

絵画の夢

横浜で生まれた岡倉天心は、日本で西洋化の波が荒れ狂っていた頃、それを押しとどめ、東京美術学校を創立し、東洋の美学を尊重し、アジアの価値観の世界的な意義を強調した。当時の多くの芸術家が彼の影響を受けて創作した“日本画”は、伝統的な中国画に則った骨法用筆（線描）や水墨による描写を離れ、色彩を重視し、印象派の朦朧とした描法をとり入れ、さらには平面表現と文様を研究して装飾性を高め、東洋の自然観に基づいて四季や草花を表現した。「当地の文化のエッセンスを吸収する」という私なりのやり方に沿って、天心の時代の絵画作品を調べるうちに、おのずと“絵画”が今回の展示の課題になった。思い返せば、子供の頃に抱いた芸術家になりたいという夢は、要するに画家になりたかったのだ。画家の一人として絵画史に連なり、先人と対話したいという思いがあった。後に現代アートを手がける中で、平面性とは遠くかけ離れたインスタレーションや爆発プロジェクトが増えていったが、火薬を使った絵の制作を続けることで、子供の頃の夢を埋め合わせてきた。今回、私は絵画に専念し、日本絵画の構図や情感、東洋の文化思想や生き方について考え、現代絵画の言語や表現手法に置き換えることを模索した。

色彩、春画と情欲

これまでの私は、火薬を使って絵を描くことから始め、屋外での爆発プロジェクトにまで発展させることが多かった。だが今回は、昼用花火の彩色の効果と材料を、平面上の絵画に凝縮させた。

日本に来たばかりの頃、カンヴァスの上で昼用花火の材料を使って爆発させ、色を出すことを試したことがあったが、その後は中断していた。火薬の爆発そのもので充分感動できたし、そのエネルギーの用途をさぐるのに時間がかかったためである。のちに、2005年のスペインでの《黒い虹》、2008年の広島での「黒い花火」、2011年のドーハでの《ブラック・セレモニー》などで、初めて色つき花火を試し、2014年の上海での個展「九級浪」のオープニングのための、3幕にわたる昼花火「挽歌」を打ち上げた際には、さらに多くの材料を準備し、確かな手応えを感じた。夜用花火は光を主とするが、光はすぐに消えてしまう。一方、昼用花火はスモークを主とする。スモークは気流によって様々に変幻し、大空をカンヴァスとして、水墨画や水彩画のように滲んでいく。こうした色や情感は、今回の“春画”のテーマに合っていた。

私は長年、春画と情欲というテーマをあためてきた。ハードコア・ポルノを世界にさきがけて合法化したデンマークで、ポルノをテーマとして中国の春宮画と日本の春画について討論し、大きな絵を何枚も描き、短編ポルノまで撮影する計画を2012年に立てたが、残念ながら実現しなかった。

横山大観などの先人が描いた日本画はすでに形式化しており、自分なりの表現を加える余地はあまりない。一方、日本の春画の自由さには興味をおぼえた。春画を描いた絵師は、いわゆる正統派ではなく、「古代中国の多くの著名な絵師も春宮画を描いた」ことを根拠に、自らの絵も芸術であると主張した。伝統的な“日本画”はもちろん主流ではあるが、その画面は窓から見る景色のようで、単なる観賞の対象になっているものが多い。だが、春画の中にはいのちが流れており、自然の変化もとり入れられている。さらには、東洋文化における時空一体の概念が含まれ、現代アートとも通じるものがあり、その意味で対話の余地が残されていた。

《人生四季》

春画のうち、私が最も多くのインスピレーションを受けたのは、月岡雪鼎が一組の男女のいのちの営みの変化を描いた《四季画卷》である。中でも女性の描写が特に印象深かった。春、娘にはまだ陰毛が見えず、はにかんで潤んでいる。夏になるとよこびを覚え、秋には朗らかで開放的となり、子を宿している。冬が来て、情けが深まり、男性の上に覆い被さってさえている……。女性の表情にそれほど大きな変化はないが、局部の色はピンクから紫へと徐々に変化しており、歳を重ねていることを感じさせる。それぞれの春画と対になった花卉図も、いのちの盛衰に沿ったものとなっている。

カンヴァスの上に火薬を使って描いた《人生四季》では、まず人物を中性化し、服装や時代的な特徴をなくした。肌の刺青は、花札の図柄からとり、四季の動植物と対応させ、人が情欲を深めていく段階を示した。柔らかくぼんやりとした「春」の光の中で、燕が鳴き交わし、欲望は子鹿のように無邪気にぶつかり合う。色鮮やかな「夏」では、百合や牡丹が花開き、カッコウが鳴く中で、ひとしきりのおたのしみ。清々しい「秋」には、すっかり知り尽くし、菊や朝顔が咲き誇り、南へ飛ぶ雁や芒が秋風を示す。「冬」はあたり一面の雪で、ゆったりとした深い情にあふれ、松の上に鶴が舞い飛び、梅の梢には小鳥が寄り添う……。春画や刺青の表現などの試みのほかに、最も予想外だったのは、色がもたらす興奮だった。昼用花火の材料の爆発によって出した赤などの色は、フランシス・ベーコンの油絵のような制御不能の狂気とサディズムを感じさせる。局部の濃厚で強烈な色合は、画面の大部分を占める、永久に安らかな灰色を挑発しているかのようで、そこには野獣を放ったような痛快さがあり、もう一人の自分が解放された気分だった。黒い火薬の原始的エネルギーと昼用花火の色彩によって情欲を表現し、生きる上での喪失や渴望を伝えていくことの今後の可能性は、少なくないようだ。

《夜桜》

もう一つの作品《夜桜》は、私がこれまで火薬の爆発によって制作した絵画のうちでも、最大のものである。横浜美術館のグラウンドギャラリーに初めて足を踏み入れた時、柱や階段、天井が散在しているような印象を受けたので、空間の中心となるような大きな絵画をつくりたいと考えた。テーマについては、あれだけ多くの日本の芸術家がこの小さな桜の花の描写に生涯をかけているのだから自分も試してみたい、それも火薬の爆発によって巨大な桜の花を描きたいと思った。桜の花は儂く、薄くてつやかだ。この繊細な美を、激しい火薬で描きだせるのだろうか。桜の花のいのちは短いからこそ尊い。火薬が爆発する一瞬と、永遠を追い求めること、これらはその運命において通じるものがないだろうか。制作過程では多くの壁にぶつかった。日本の火薬は、種類を問わず、点火した途端「ボン！」と燃え尽きてしまう。高品質で異物が少ない分、焼け跡が小さくなり、大きな面積を埋められるほどの滲みの効果がなかなか得られない。気分が沈む日が続いた。

実際に展示してみると、想定していた滲みや微妙な変化がそれほど得られなかったとはいえ、かえって落ち着いてシンプルになり、《人生四季》と補完しあうようだった。《夜桜》の制作では、火薬との関係が再び悪化したが、コントロールが難しいところにあるその魅力と、かき立てられた不満による渴望が、私を《人生四季》の創作に没頭させた。

桜の花の運命と人の情感や情欲は、いのちの盛衰にまつわる。また、火薬の爆発で色づけした磁器《春夏秋冬》と、テラコッタの花を藤蔓に結びつけた《朝顔》は、大自然のリズムにつながる。《壁撞き》の99匹の狼の群れは、目に見えない隔たりを象徴する透明なガラスの壁に繰り返し衝突する……。これらはいずれも、宇宙や自然、人類社会の循環にとけ込み、私のいのちの軌跡そのもので、芸術、生き方やその時々感情を含んでいる。これらにより「帰去来」の本質と現実が形づくられている。

中国の東南にある小さな町からやって来た、若くて血気盛んな芸術家が、日本で厚情を受け、孫悟空のように転げ回って成長し、天宮を大騒ぎさせた！1994年の読売新聞の、年末特集の中に「蔡國強が活躍、欧米衰弱の〈現代〉」（美術欄）*1という記事があった。当時、日本のアート界は西洋を中心とした東西両文化の二元論を意識しすぎていると感じた私は、第三の可能性を探したいと思った。そこで、“もっと広い宇宙の時空から人類文明を見る”という「外星人のためのプロジェクト」シリーズを始めた。

だが、その後、西洋に住み、世界のあちこちをさすらうことになった。今回の帰還は、かつてそこで多くのものを得て様々に思考した、慕わしい“東洋”を自分の中に取り戻すためだ。まさに感激の至り、感慨無量である。宇宙、地球、自然、それに世界の多様な文化を自由に行きかい、故郷にいた頃に星空を見上げた少年の目を常に忘れず、若かりし頃の認識や考え、世界の表現の仕方を振り返る。これは単なる回帰ではなく、また決して楽な道でもない。私の旅は始まったばかりだ。

*1 菅原教夫、『読売新聞』、1994年12月14日（夕刊）、11面

書名 : 「蔡國強展：帰去来」

発行予定日 : 2015年7月24日

出版社 : モ・クシュラ株式会社

判形 : A4変形、上製本

価格 : 2800円（税込）

内容 : 谷川俊太郎の詩、全作品図版、メイキング・ドキュメンタリー、学芸員エッセイ

（逢坂恵理子、木村絵理子、沼田英子、中村尚明 [掲載順]）、蔡國強によるステートメント、ならびに自伝「99の物語」日本語版を収録。※日英表記（「99の物語」を除く）

本展出品作について

《夜桜》 *Nighttime Sakura*

大画面に描かれるのは、かがり火の灯りに浮かび上がる巨大な桜、そして枝の間から眼光鋭く顔を覗かせるミミズクです。日本の春を象徴するものとして、古くから数多く描かれてきた桜というモチーフに取り組んだ蔡國強は、開花の瞬間の力強さと儂く散る潔さに、火薬との共通点を見出しました。蔡が独自に編み出した表現技法である火薬ドローイングは、主に和紙とカンヴァスを支持体にする2種があり、型紙や覆いを巧みに用いて、支持体上で様々な種類の火薬を爆破させることでイメージを定着させます。本作では、市民や学生のボランティアたちとの協働により、高知県で生産される大判の和紙の上で、火薬と、漢方薬に使われる鶏冠石（けいかんせき）の粉末を混ぜ合わせることで、淡く黄味がかった色合いを実現しています。

《人生四季：春、夏、秋、冬》 *Seasons of Life: Spring, Summer, Fall, Winter*

4面のカンヴァスには、四季を表す草花や鳥、そして睦み合う男女の姿が描かれています。江戸時代後期、上方で活躍した絵師・月岡雪鼎（つきおかせつてい）の肉筆春画《四季画卷》に想を得た本作は、季節のうつろいのなかで、男女の愛のいとなみが象徴的に表現されています。中性的に描かれた男女の身体には、それぞれの季節に応じた花札の絵柄が刺青のように配され、つがいの鳥とともに描かれた桜〔春〕、菖蒲〔夏〕、菊とススキ〔秋〕、水仙と梅〔冬〕といった背景と相まって、艶やかに人と自然の巡りゆく生を表現しています。霞のような朦朧とした春、日差しに映える植物の赤と青を強調した夏、清明な空気感を出した秋、ほんのりとした雪景色を表した冬。本作において蔡國強は、顔料と火薬の爆発痕が作り出す微妙な表現に取り組み、鮮やかな色彩を加えた火薬絵画に初挑戦しました。

《春夏秋冬》 *Spring, Summer, Fall, Winter*

蔡國強にとって、故郷、泉州は、創造活動の源泉の一つです。泉州市の徳化窯は、古くから中国有数の白磁の産地として有名で、世界各地に輸出されました。透明感のある乳白色の素地と繊細な細工で人気を博し、欧米ではBlanc de Chineと呼ばれて珍重されました。蔡は、伝統技術を継承する職人とのコラボレーションで白磁の四季の花鳥画を制作しました。それぞれ60枚の白磁板で構成された4枚のパネルには、牡丹、蓮、菊、梅を中心に四季の情景が薄い磁土を重ねて繊細に造形されています。蔡は、焼成された白磁板に、火薬を撒いて爆発させることにより陰影を施し、風や雨、光など、自然の循環を促す大気の動きを表現しています。

《朝顔》 *Morning Glory*

天上の植物が地上に降りてきたかのように、展示室の中央に、花と葉を茂らせた朝顔の蔓（つる）が絡まりながら吊られています。この作品は、本展のために、横浜美術大学の学生との協働で制作されました。蔡は、学生たちが制作したテラコッタの花と葉の上に火薬を撒いて爆発をさせ、炎や煙で複雑な陰影をつけました。自然の藤蔓（ふじづる）に付けられた花や葉は、生き生きとした表情を見せています。《春夏秋冬》が展示された部屋の中央に、土で作られた作品を配する象徴的な展示は、五種類の元素、木／春、火／夏、土／季節の変化、金／秋、水／冬の影響関係によって万物の変化循環を説明する中国の自然哲学、五行思想を暗示しているようです。

《壁撞き》《イリュージョンⅡ》 Head On and Illusion II

《壁撞き》と《イリュージョンⅡ》は、2006年にベルリンのドイツ・グッゲンハイムでの蔡國強のドイツでの初の個展『ヘッド・オン』に展示されました。

《壁撞き》のガラス壁はベルリンの壁（1961-1989）とほぼ同じ高さで作られています。かつて街を東西に分断していた壁が、1989年に市民運動が高まる中で突如解放されたことは、米ソ冷戦時代終焉の嚆矢（こうし）となりました。しかし続くドイツ再統一の過程で、東と西の人々の間には様々な見えない壁があることが明らかとなりました。蔡は、「見える壁は簡単に壊れるが、見えない壁を崩すことは難しい」と語っています。透明なガラス壁には、99体のリアルな狼のフィギュアが群れを成して突入しています。蔡にとって99は「連続性」や「完結を知らずに先頭を進む」ことを、また狼は「共同体意識、英雄的精神、勇気」を意味しています。

作家プロフィール

蔡國強（ツアイ・グオチャン） / Cai Guo-Qiang



Photo by: Wen-You Cai courtesy Cai Studio

1957年、中国福建省泉州市生まれ、ニューヨーク在住。

上海戯劇学院で舞台美術を学んだ後、1986年末から1995年まで日本に滞在、筑波大学で学ぶ。

1995年以降はニューヨークを拠点に活動。

近年の主な個展とプロジェクト

「透明モニュメント」ニューヨーク、メトロポリタン美術館（2006年）

「アイ・ウォント・トゥ・ビリーブ」ニューヨーク、ソロモン・グッゲンハイム美術館、北京中国美術館（2008年）

ビルバオ、グッゲンハイム美術館（2009年）

「曇気楼」ドーハ、マトハフ・アラブ近代美術館（2011年）

「スカイ・ラダー」ロサンゼルス、MOCA（2012年）

「農民ダヴィンチ」ブラジル、サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ巡回（2013年）
「Falling Back to Earth／帰去來兮」（2013年）クイーンズランド州立美術館（オーストラリア）
「九級浪」上海当代芸術博物館（2014年）ほか。
また、2008年の北京オリンピック・パラリンピック開会式・閉会式で視覚特効芸術監督を務める。

受賞歴

第48回ヴェネチア・ビエンナーレ「国際金獅子賞」（1999年）
「アルパート芸術賞」（2001年）
第7回「ヒロシマ賞」（2007年）
第20回「福岡アジア文化賞受賞」（2009年）
第24回「高松宮殿下記念世界文化賞」（2012年）
「米国国務院芸術勲章」（2012年）など。

開催概要

蔡國強展：帰去來

Cai Guo-Qiang : There and Back Again

会期 : 2015年7月11日（土）～10月18日（日）
開館時間 : 10時～18時（入館は17時30分まで）
※夜間開館：2015年9月16日（水）、9月18日（金）は20時まで開館（入館は19時30分まで）
休館日 : 木曜日

主催 : 横浜美術館、読売新聞社
後援 : 中国大使館、横浜市、一般社団法人日本福建経済文化促進会
特別協賛 : 寺田倉庫
協賛 : 華為技術日本株式会社(ファーウェイ・ジャパン)、株式会社 資生堂
特別協力 : 日本航空
協力 : ドイツ銀行グループ、キャノンマーケティングジャパン株式会社、弁護士法人 BridgeRoots ブリッジルーツ、株式会社キクシマ、東京藝術大学大学院映像研究科 桂英史研究室 | geidaiRAM、横浜美術大学、みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、FMヨコハマ、首都高速道路株式会社

本展に関するお問合せ：横浜美術館 広報・渉外チーム 宮野律子・藤井聡子・窪田知恵

TEL : 045-221-0319 FAX:045-221-0317 E-mail : pr-yma@yaf.or.jp